

F/T09

フェスティバル / トーキョー

PRESS RELEASE

『Cargo Tokyo-Yokohama』

構成：シュテファン・ケーギ 【スイス】

演出：イェルク・カレンバウアー 【ドイツ】

(リミニ・プロトコル)

於：東京都内・横浜市内港湾部



© Anja Mayer

客席はトラックの荷台、トラック運転手はホンモノ？
湾岸に広がる物流拠点を巡る、観客移動型演劇！

お問い合わせ：

フェスティバル/トーキョー実行委員会 <http://festival-tokyo.jp>

〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 にしすがも創造舎

Tel: 03-5961-5202 Fax: 03-5961-5207 担当：クラウトハイム・ウルリケ u-krautheim@anj.or.jp

急な坂スタジオ (NPO 法人アートプラットフォーム) <http://kyunasaka.jp>

〒220-0032 横浜市西区老松町 26-1

Tel. 045-250-5388 Fax.045-261-1300 担当：小島寛大 h-kojima@kyunasaka.jp

／ 作品について

ドキュメンタリー演劇の最先鋭、リミニ・プロトコル再来！

演劇界の革命児的存在と言えるリミニ・プロトコルが 2008 年『ムネモパーク』(東京国際芸術祭)、2009 年『カール・マルクス: 資本論、第一巻』(フェスティバル/トーキョー)に続き、今回、日本では初となる野外パフォーマンスに挑戦する。

ドキュメンタリー演劇の手法で世界中の注目を集めているアーティスト集団、リミニ・プロトコル。「リアリティ対演劇」の関係を常に新しく定義し続けてきた彼らの作品では、主に二つの手法が用いられる。一つは『ムネモパーク』や『資本論』のように、リミニ・プロトコルが「日常のエキスパート」と呼ぶ、作品のテーマと繋がる特別な経験を持った人々を舞台に立たせ、現実そのものを舞台に上げるもの。もう一つは、劇場の外へ出て、社会の様々な現場(裁判所、株主総会、市場、コールセンター等)の日常に演劇性を発見する野外パフォーマンスで、これらは共に爆発的な人気を呼んできた。

『Cargo Tokyo-Yokohama(カーゴ トーキョー・ヨコハマ)』では、彼ら自身が 06 年に発表した野外パフォーマンスの傑作『Cargo Sofia-X(カーゴ ソフィア・エックス)』のコンセプトをもとに、日本オリジナルの作品が製作される。

『Cargo Sofia-X』

『Cargo Sofia-X』は、06 年、バーゼル市(スイス)で製作され、ヨーロッパ各地および中近東の 30 都市あまりで上演を重ね、大ヒットした。EU の拡大やグローバル化による物流の激化にインスピレーションを受けて製作されたもので、観客は巨大なトラックの荷台を改造した客席に座り、そのまま物流拠点を巡る移動型パフォーマンス。運転手兼パフォーマーには、2 名のホンモノのブルガリア人トラック運転手が起用された。ブルガリアのソフィアから別の西欧の町へと安い賃金で長距離を走る彼らの日常生活や仕事に関する実体験を聞きながら、2 時間程のツアーでトラックは都市の意外な場所を巡っていく。

『Cargo Tokyo-Yokohama』

『Cargo Sofia-X』のコンセプトに基づき、舞台を日本に置き換えて製作される『Cargo Tokyo-Yokohama』。島国・日本における都市と物流のリアルとは？ グローバル化が日本の物流に与えた影響は？そして、それを支える日本のトラックドライバーの日常は？

アーティストは、2 ヶ月間にわたって横浜・東京に滞在し、港湾部や近郊の物流を徹底的にリサーチし、その結果をもとにオリジナル・シナリオを執筆。もちろん出演者も日本在住のホンモノのトラック運転手を選出。歴史や地理、社会統計を実際の素材として盛り込みながら、日本でのみ可能な作品を作り上げる。

「荷物」の目線になった観客たちは、物流のルートをたどりながら、見慣れた横浜や東京の風景とはまったく違う都市のリアリティを発見することになるだろう。

/アーティスト・プロフィール

リミニ・プロトコル Rimini Protokoll

シュテファン・ケーギ(Stefan Kaegi)、ヘルガルド・ハウグ(Helgard Haug)、ダニエル・ヴェツェル(Daniel Wetzel)の3人によるアートプロジェクト・ユニット。2000年、フランクフルトで結成された。公共空間におけるパフォーマンスやドキュメンタリー演劇の手法を用いた型破りなプロジェクトの数々で世界の注目を集めている。出演者には、プロの俳優ではなく作品テーマに則した特別な経験や知識を持つ一般の人々を起用し、「ある現実をそのまま舞台上にあげる」という手法を用い、ヨーロッパで爆発的な人気を誇っている。04年以降はベルリンのヘッベル劇場に拠点を置き、それぞれが個人のプロジェクトを発表する一方で、メンバーの2人、もしくは3人のプロジェクトも多く発表している。日本では、これまでに東京国際芸術祭 2008(08年3月)において『ムネモパーク』、フェスティバル/トーキョー2009春(09年2月~3月)において『カール・マルクス:資本論、第一巻』を上演し、好評を博した。

シュテファン・ケーギ (構成) Stefan Kaegi

72年スイス生まれ。チューリッヒの美術大学でビジュアル・アーツを学んだ後、ドイツのギーゼン大学で演劇を学ぶ。以後ヨーロッパおよび南アメリカを中心に、様々な文脈の中でドキュメンタリー演劇やラジオドラマ、都市空間におけるパフォーマンスを創作。アルゼンチンで制作した作品『Torero Portero』は、失業中の施設管理人3名が、人通りの激しい路上から、カフェの窓越しに彼らを眺める観客に対して、以前勤めていた大邸宅での警備員の仕事について語るというもの。同作品はミュンヘン、フランクフルト、ベルリン、ボゴタ、リオ・デ・ジャネイロやサオ・アポロ等で上演された。05年バーゼル劇場で創作した『ムネモパーク』は、1:87スケールの生映画セットである模型の世界を取り上げたもので、ドイツの政治フリンジ演劇祭(politics in fringe theatre festival)の審査員賞を受賞。またアヴィニヨン、モンリオール、バルゼロナ、ウィーン、タンペレ(フィンランド)および東京(東京国際芸術祭 2008)に招聘された。また06年に初演された『カーゴ・ソフィア』は、ブルガリア人ドライバー2名が運転するトラックを使用した移動型パフォーマンスとして、ヨーロッパおよび中東29都市を巡回した。



イェルク・カレンバウアー (演出) Jörg Karrenbauer

ベルリンで演劇と比較文学を学んだ後、劇作家・演出家ルネ・ポレシュと活動を共にする。リミニ・プロトコルの作品には『deadline』に映像として参加したのを皮切りに、『Cargo Sofia-X』の製作に携わり、2年間でヨーロッパ・中東29都市における上演を実現させた。また、これまでにハンブルクのドイツ劇場におけるコンサートや演劇祭の企画・構成、自身の作品の劇作・演出など、現在ベルリンを拠点に多彩な活動を行っている。

／ リミニ・プロトコル / 受賞歴

- 02年 『Shooting Bourbaki』で Impulse フェスティバル賞
- 05年 『ムネモパーク』で Politik im Freien Theater フェスティバルで審査員賞
『Schwarzenbergplatz』でネストロイ演劇賞の特別賞にノミネート
- 06年 『カール・マルクス: 資本論、第一巻』でミュールハイム戯曲賞及びオーディエンス賞
- 07年 ドイツ演劇賞「ファウスト」(特別賞)
『Peymannbeschimpfung』が「今月のベストラジオドラマ」に選ばれる
- 08年 プレミオ・ヨーロッパ演劇賞 (部門: 演劇におけるニュー・リアリティ)
『カール・マルクス: 資本論、第一巻』のラジオドラマ版で Hörspielpreis der Kriegsblinden ラジオドラマ賞

／ Cargo Sofia-X / 主な上演都市

- 06年 5月・6月 「Cargo Sofia Basel」(スイス・バーゼル)
6月 「Cargo Sofia Berlin」(ドイツ・ベルリン)
7月 「Cargo Sofia Essen」(ドイツ、エッセン)
7月 「Cargo Sofia-Avignon」(フランス・アヴィニョン)
8月 「Cargo Sofia-Ljubljana」(スロヴェニア・リュブリャナ)
9月 「Cargo Sofia-Warzawa」(ポーランド・ワルシャワ)
9月 「Cargo Sofia-Zagreb」(クロアチア・ザグラブ)
9月 「Cargo Sofia-Beograd」(セルビア・ベオグラード)
11月 「Cargo Sofia-Riga」(ラトヴィア・リガ)
11月・12月 「Cargo Sofia-Frankfurt」(ドイツ・フランクフルト)
12月 「Cargo Sofia-Vienna」(オーストリア・ウィーン)
- 07年 1月 「Cargo Sofia-Strassburg」(フランス・ストラスブール)
5月 「Cargo Sofia-Dublin」(アイルランド・ダブリン)
6月 「Cargo Sofia-Copenhagen」(デンマーク・コペンハーゲン)
11月 「Cargo Sofia-Amman」(ヨルダン・アンマン)
11月 「Cargo Sofia-Damascus」(ヨルダン・ダマスカス)
- 08年 3月 「Cargo Sofia-Tallinn」(リトアニア・タリン)
4月 「Cargo Sofia-Bordeaux」(フランス・ボルドー)
4月・5月 「Cargo Sofia-Barcelona」(スペイン・バルセロナ)
5月 「Cargo Sofia-Cavillon」(フランス・カヴァイヨン)
6月 「Cargo Sofia-Saarbruecken」(ドイツ・ザールブリュッケン)
6月・7月 「Cargo Sofia-Marseille」(フランス・マルセイユ)
7月 「Cargo Sofia-Paris」(フランス・パリ)

／ 『Cargo Tokyo-Yokohama』 リサーチ日記（抜粋）

『Cargo Tokyo-Yokohama』の演出家、イェルク・カレンバウアーが2009年5月31日～6月13日に来日。滞在の目的は、『Cargo Tokyo-Yokohama』 ルートのリサーチ、トラック運転手の選考、トラック業界や物流に関する様々な組織や民間企業へのヒアリング。長時間を車の中で過ごし、埠頭や高速道路を走りながら、コンテナヤード、トラックパーキング、運転手の食堂、市場などをリサーチ、『Cargo Tokyo-Yokohama』のルートを決めていく。

6月1日 / 横浜

初めての横浜のリサーチ。まずは大黒埠頭で横浜港流通センターを発見！ 数階建ての倉庫は海外にないらしいので、イェルクは興奮する。スパイラル型のランプを嬉しそうに何回も6階の屋上まで上がったたり、下っていったりする。だが、『Cargo』で使うトラックは結構ベテランのトラック。ここを上がって行けるかどうか……。

6月2日 / 横浜

本牧埠頭の食堂で休憩しているトラックドライバーに大型トラック洗車機の場所を聞くと、近くのガソリンスタンドがあると教えてくれる。だが、ちょっと小さく見える。ドイツから持ってくるVOLVOトラックはこれに入るのかな？ ガソリンスタンドの店員に聞いてみたところ、洗車機の高さは3.98m。VOLVOトラックは空気サスペンションによって3.80m～4.00mと高さが変わる。微妙……。

6月3日 / 東京

品川の近くにある物流博物館を訪問、見学。デコトラの雑誌、60年代の運送会社のPR映像や東京都の物流拠点の模型等、色々面白い資料がおいてある。イェルクの関心を引いたのは、特にデコトラと日本通運で行われている体操の話。

午後、東京の下見ツアーに出発。品川埠頭から大井埠頭、平和島、京浜島を回っていく。京浜島のトラックターミナルではトラックが活発に動いていて、訪問地としてよさそう。ツアーの途中、不思議なところも色々発見。

6月4日 / 横浜

横浜市港湾局に本牧埠頭と大黒埠頭の立ち入り制限区域を案内してもらう。見せてもらったのは国際コンテナターミナル、車両ターミナルセンター、横浜流通センター等。

6月5日 / 東京

日本通運のスタッフに仕事の内容や現状についてヒアリング。日本通運版の体操についても確認。やっているかどうかを尋ねるとあまり真面目にやっていないそう。時代が変わりつつある。

6月8日 / 横浜

トラックドライバーの面接。初日は4人。日本の運送業界が不況であることが皆さんの話で直ぐに分かる。例えば運送会社に勤めていてもその会社から今一切仕事をもらえていなくて、収入がゼロの人。また外国人のドライバーで、現在は失業中の人。やはり不況の影響で、まず初めにクビになるのはやはり外国人。今まで走っていたルートや運んでいた荷物、ドライバーの日常を色々聞けたことに加えて、現在の経済状況を実感できたことも収穫。

6月9日 / 東京

東京都トラック協会への取材。日本のトラック輸送産業についての立派な資料をもらう。運送業の競争が最近激化をしていることを知る。需要は伸びていないが、毎年2,000~2,500社が参入している。小規模な会社が多く必死な競争が続いているらしい。

午後、全日本運輸産業労働組合連合会に取材。トラック事故の原因、トラックドライバーの労働条件についてなかなか表に出ない情報を得られる。

6月10日 / 横浜

ドライバー面接第二部。応募してきたドライバーの中に、フォークリフトのベテランで、若いドライバー達を教えている方がいた。今回はトラックドライバーだけではなく、フォークリフト運転手にも出演してもらうか？

6月11日 / 横浜

改めて横浜市港湾局と下見ツアー。その途中で横浜流通センターの方と面会。「演劇とは何か」という根本的な議論が始まる。今回の作品ではトラックが「劇場」で、客席から観る芝居は「現実」？ 職員の中に、『Cargo Tokyo-Yokohama』に非常に興味を持ち、演出を手伝ってくれそうなくらいアイデアに溢れた方がいた。

6月13日 イェルク・カレンバウアー帰国。

／劇評より

リミニ・プロトコルという演出家 3 人組の一人、シュテファン・ケーギの『カーゴ・ソフィア―ベルリン』は、作品が結果としてどれほど感動的なものになるかが、大いに見ものだ。観客を乗せてベルリン市内(もしくは別の大都市内)を走り回るトラックの窓ガラスには、ヴィリ・ベッツ社のスキャンダルを伝えるニュースの文字が光る。ドイツ・ロイトリンゲン市を拠点とする運送会社ヴィリ・ベッツは 1994 年、ブルガリアの運送会社ソマトを 4000 人のドライバーも含めて買収した。そしてベッツを始め複数の運送会社が、東ヨーロッパ出身のドライバーに十分な賃金を払わず、事実上違法雇用していたことにより、ドイツの税務官庁は数百万ユーロの損失をこうむった。

だが、『カーゴ・ソフィア』では、純然たるニュースは副次的なものに過ぎない。作品の中心は、スキャンダルの実際の当事者との出会いである。ベッツのような運送会社に長年搾取されてきたブルガリア人ドライバー 2 人が観客を、閉所恐怖症を引き起こしそうなほど狭いトラックの世界へ導き、彼らドライバーは職業柄知っているが、観客には普通一生縁のない場所を案内してくれる。例えば、中央卸売市場や倉庫、荷卸場、ランプウェイ。観客は、私たちが日々消費する商品が生産される場所が、いかに見苦しい場所かを知り、そのような場所で働く人たち自身が、いかに商品になっているのかに気づく。

(taz 紙、2007 年 4 月 4 日、Aurelia Sorrento)

『カーゴ・ソフィア』は、内容的に非常に面白いテーマを提示するのみではない。この作品は、シュテファン・ケーギが今やドキュメンタリー演劇という鍵盤の上でいかに名人芸的な腕前をみせるようになったかをも示している。(ビデオ、音楽、プロジェクション、風景といった)作品に組み込まれるメディアの持つ韻律とリズムに対して、明らかに揺らぎないセンスを持つこの演出家は、観客を引きずりこみ、街の風景を見せる「道路のシンフォニー」を作曲する。トラックの側面に装着されたガラス窓の内部にディスプレイされた観客は、不審の目でじろじろ見られる対象、すなわちドライバーや歩行者の見慣れた現実には全くそぐわないモノとなる。そして時に観客は、好感の持てるツアーガイドが目の前に見せてくれる現実を、黙って観察したり、覗き見たりする。この作品の一番重要なポイントは、芝居の場面がかわっていくのではなく、観客が移動していくことだ。こうしてできる逆転したロード・ムービーは、(トラックの中にいる観客も、外でたまたまトラックを見た人も含め、)個々人の感覚を混乱させる。これだけでもかなり楽しい。

(Corpus 誌、2006 年 12 月 20 日、Judith Helmer)

もう一つの市内観光ツアー、「社会彫刻」、政治的なトランジット・レッスン、生のロード・ムービー、、、この作品は同時に様々なものとしてあり得る。そして<正統派>演劇を脅かすほどに魅力的な、もう一つの演劇でもある。

(ケルニシェ・ルンドシャウ紙、2008 年 1 月 16 日、Hartmut Wilmes)

ケーギの現実と虚構を用いた「遊び」。これは彼の所属するリミニ・プロトコルというグループのトレードマークであるのだが、彼のそれは、現実と虚構の輪郭がなくなるほどに綿密に考えられ、細部にわたって精巧に調整されている。トラック＝バスの窓越しに見える、古タイヤの巨大な山。これは置き去られているだけなのか、それとも演出の一部なのか。中央卸売市場の窓口に並んでいる男たち。彼らはエキストラなのか、それとも書類手続きのた

めに列をなす業者なのか。もはや何も信じられない。そこに極めつけのレディメイドが。ソフィアでのゲネプロでのこと。サッカー競技場でチェルシーFC対レフスキ・ソフィアの試合があり、周辺の道路は大騒ぎだ。「これは現実？それとも君の演出？」と聞くと、策略家で現実の偽装者、代用品販売人シュテファン・ケーギは、「実は、僕にも分からない」と答えた。

(南ドイツ新聞、2006年11月11日、Renate Klett)

『カーゴ・ソフィア』は日常への演劇的介入であり、それは我々の知覚をターゲットにしている。観客はこの介入を楽しく受け入れることができ、刺激とインスピレーションを受け取る。そして熟考すると同時に、一瞬にして作品に引き込まれる。私は自分が商品になりさがるのを、かつてこれ程までに喜んで受け入れたことはない。

(スイスラジオ局 DRS、2006年6月21日、Dagmar Walser)

／ キャスト/スタッフ

構成	シュテファン・ケーギ Stefan Kaegi
演出	イエルク・カレンバウアー Jörg Karrenbauer
製作	HAU 劇場ベルリン Hebbel am Ufer (HAU) Berlin
出演	トラック運転手 2 名 (リサーチにより選出)、歌手 1 名 (リサーチにより選出)
日本版テキスト構成・通訳	萩原ヴァレントヴィッツ健 Ken Hagiwara-Wallentowitz
制作	ウルリケ・クラウトハイム Ulrike Krautheim 小島寛大 (急な坂スタジオ) Hiroto Kojima (Steep Slope Studio)
テクニカル・コーディネーター	遠藤豊 (ルフトツーク) Yutaka Endo (Luftzug)
テクニカル・スタッフ	河内崇 (ルフトツーク) Takashi Kawachi (Luftzug)、堤田祐史 (レイヤー) Yuji Tsutsumida (LAYEE INC.)、細川浩伸 (急な坂スタジオ) Hironobu Hosokawa (Steep Slope Studio)
主催	フェスティバル/トーキョー Festival / Tokyo、急な坂スタジオ (NPO 法人アートプラットフォーム) Steep Slope Studio (Yokohama Arts Platform)
共催	アーツコミッション・ヨコハマ (横浜市開港 150 周年・創造都市事業本部 / 横浜市芸術文化振興財団) Arts Commission Yokohama (150 th Anniversary of the Port Opening and Creative City Headquarter / Yohohama Arts Foundation)
助成	平成 21 年度文化庁国際芸術交流支援事業 Supported by The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2009
後援	ドイツ連邦共和国大使館 Deutsche Botschaft Tokyo
協力	ドイツ文化センター Goethe-Institut Japan



/ 公演情報

詳細は決定次第、HP等にて発表。

F/T 回数券対象外。

／ 写真/クレジット一覧

『Cargo Sofia-X』



© Anja Mayer



© Nada Zgank / memento



- ・ご利用になる場合は、写真家のクレジットを必ず併記してください。
- ・原則、トリミングおよび加工は不可。

© Anja Mayer

ポートレート

シュテファン・ケーギ Stefan Kaegi



クレジット不要

イエルク・カレンバウアー Jörg Karrenbauer



クレジット不要